

ステツキ

寺田寅彦

青空文庫

初めは四本足、次に二本足、最後に三本足で歩くものは何かというなぞの発明された時代には、今のよう^に若い者がステッキなどついて歩く習慣はなかったものと思われる。杖がつきもの^{つえ}になっている魔法使いはたい^いばあさんかじいさんであるが、しかし彼らの杖はだ^いぶ使用の目的が違^{ちが}っていて、孫悟空^{そんごくう}のなんとか棒と同様にきわめて精巧な科学的^{てきせき}内容をもっていたものと思われる。シナの仙^{せん}人^{にん}の持^もっていた杖は道術にも使^{もち}われたであろうが、山歩^{やま}きに必要^{ひつやう}な金剛杖^{こんごうづえ}の役にも立^たったであろう。羊飼^{やぎ}い^いは子供でも長い杖を持^もっているが、あれはなんの用^{もち}にたつものか自分^{自分}は知らない。牧羊^{ぼくせん}者の祖先^{そぜん}が山地^{さんち}の住民^{じゅうみん}であったためか、それ

とも羊を追い回しおおかみでも追い払うために使われたものか、ともかくもいわゆるステッキとはだいぶちがったものである。それから雲助の息杖いきづえというものがある、あれの使用法などは研究してみたらいぶおもしろそうなものであるが、今日では芝居か映画のほかには山中へ行かなければ容易に見られないものになった。あれも現代におけるステッキの概念にはあてはまらないもので、昔の交通機関としての山駕籠やまかごという機械の部分品と考えるべきものであろう。

自分たちの子供の時分には、田舎いなかのおばあさんというものは、大概腰のところだからだが百二十度ないし九十度ぐらいに折れ曲がっていたもので、歩くにはどうしても杖を第三の足にしなないと

重力に対するつりあいがとれなかったものである。実に悲惨な格好をしていたものであった。木枯らしの吹くたそがれ時などに背中へ小さなふろしき包みなど背負つてとぼとぼ野道を歩いている姿を見ると、ひどく感傷的になつてわあつと泣き出したいような気持ちになつたものである。もういつそう悲惨なのは田んぼ道のそばの小米ぞの中をじゃぶじゃぶ歩きながら枯れ木のような足に吸いついた蛭ひるを取つては小さなもめんの袋へ入れているさういふばあさんであつた。こうして採集した蛭を売つて二銭三銭の生活費をかせいでいたのである。思い出すだけでも世界が暗くなるくらいで、杖つえという杖の中でもさういふばあさんの杖などは最もみじめな杖であろう。

親類のじいさんで ちゆうぶう 中 風 をしてから十年も生きていたのがあった。それが寒い時候にはいつでも袖無しの道服を着て庭の日向ひなたの椅子いすに腰をかけていながら片手に長い杖を布切れで巻いたのを持って、そうしていつまでもじっとしたままで小半日ぐらいのあいだ坊主頭を日に照らしていた。あたまの上にはたいてい蠅はえが一匹ぐらいとまっていた。そういう夢のような幼時の記憶があるが、このように腰をかけながらついている杖などは杖としての珍しい用途であろう。力学的に考えるとやはりからだの安定を保つために必要な支柱の役をしていたに相違ない。

しかしこういうあらゆる杖に比べると、いわゆるステッキほどわけのわからない品物はないと思われる。屈強の青壮年が体重を

ささえるために支柱とするはずはないからである。もつとも銀座アルプスのデパートの階段などを上る時は多少の助けになるかもしれないが、そういう時でも彼らは必ずしもステッキの先端を床に触れているとは限らないのである。

西洋でいつのころから今のようなステッキが行なわれだしたのか知らないが、ロココの時代には貴婦人がたがりボン付きの長い杖をついている絵がある。またそのころのやさ男が粉をふりかけた鬢かざりのしつぽをリボンで結んで、細身のステッキを小脇こわきにかかえ込んで胸をそらして澄ましている木版絵などもある。とにかくあのころ以後はずつと行なわれて今日に至ったものであろう。いずれにしても人間がみんな働くのに忙しくて両方の手がいつもふ

さがっているような時代には全然用のないものであったに相違ない。人間の社会生活が進歩した結果として、何もしないで楽に遊んでいられる人間が多数に存在するようになる、今まで使っていた手が暇になって、全く言葉どおりに手持ちぶさたを感じる。そうかといって太平のシャンゼリゼーの大通りやボアの小道を散歩するのに、まさか弓矢や人殺し用の棍こんぼう棒や台所用のパン棒を携えるわけにも行かないから、その代わりに何かしら手ごろな棒つえきれを持つことになったのではないかとも想像される。とにかく昔のシナでは杖つえの字は「持」の字と同じで手に持つものならなんでも「杖」であつたらしい。

しかし、太平の世の中でもまれには都大路に白昼追いはぎが出

たり、少し貸してくれなどという相手も出現するから、そういう時にはこれがたちまちにして原始時代の武器として甦生そせいするという可能性も備えているのである。実際自分らの子供の時分に自由党のけんかの頻ひん繁ばんであったところは鋏くわの柄をかつぎ回ったりまたいわゆる仕込み杖という物騒なステッキを持ち歩くことが流行して、ついには子供用のおもちやの仕込み杖さえできていたくらいである。西洋でも映画「三文オペラ」の親方マツキ・メツサーがやはり仕込み杖を持っているのである。

とにかく、他に実務的な携帯品があつたのでは、せつかくのステッキもただのじじむさい杖になってしまう。よごれた折り鞆かばんなどを片手にぶらさげてはいけないのである。やはり全く遊ぶより

ほかに用のない人がステッキ、そうしてステッキだけをかかえていないと板につかないようである。ゴルフのなんとかいうあの棒などもそうである。歴史は繰り返すとすれば今に貴婦人たちやモガたちが等身大のリボン付きのステッキにハンドバッグでもつるしたのを持って銀座を歩くようになるとおもしろい見物みものであろう。ついでながら、桿かんじょうきん状菌バクテリアの語源がギリシア語のステッキであるのはちよつとおもしろい。病魔のステッキが体内をあばれ回るのである。

日本で製造して売っている金具付きのステッキはみんな少し使っていると金具がもげたり、はじけたり、へこんだりしてだめである。ここ数年来の経験でこの事実を確かめることができた。も

つともステツキに限らず大概の国産商品がそうであり、ちやんとした器械類でさえも長持ちのするのは珍しい。ステツキが用のない人のぜいたく品ならば、なるべく早くいけなくなつて、始終新しく取り換えるほうがいいかもしれない。実際新しいステツキを買うとあと一週間ぐらひは勉強ができるという人もいるくらいである。しかし国産の時計や呼び鈴などのすぐ悪くなるのは全く始末が悪く日本の名誉のために情けなくなる。

年を取るとやはり杖が役に立つ。毎日あがる階段で杖の役に立つ程度によつてその日のからだのぐあいによしあしがわかる。健康のバロメーターになる。字引きで見ると杖の字は昔は尺度の意味であつたという話があるから、昔もやはりメーターの一種であ

つたのである。

(昭和七年十一月、週刊朝日)

青空文庫情報

底本：「寺田寅彦全集 第六卷」岩波書店

1961（昭和36）年3月7日第1刷発行

初出：「週刊朝日」

1932（昭和7）年11月号

入力：Cyobirin

校正：佳代子

2003年10月2日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www>

W.aozora.gr.jp) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランテイアの皆さんです。

ステッキ

寺田寅彦

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しむ青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>